

海外スポーツ教育事情

「米国東海岸周辺地域のボーディングスクールにおけるスポーツ教育について」

金谷麻理子、松田裕雄（筑波大学体育系）

【1】はじめに

本論は、2009年～2012年に実施された筑波大学体育センターにおける SPERT プロジェクト<sup>\*1</sup>の一環で調査対象としたボーディングスクールの紹介である。

我々は SPERT プロジェクトにおいて、筑波大学体育センターにおける大学体育の教育活動の変遷を総括すると同時に、我が国における大学体育発祥の背景と理念についても検討した。これによってアメリカ合衆国(以下、米国)が我が国の戦後の教育改革に大きな影響を与えたこと、大学体育の目的に全人格教育が組み込まれていたことなどが推察された(松田、2012)。そして、これらのことを踏まえて、「米国」、「教養教育」、「スポーツ」、「教育機関」などをキーワードに、今後の大学体育の進むべき方向性について探っていたところ、ボーディングスクールに巡り会った。

ボーディングスクールは、米国東海岸地域を中心に展開され、世界を牽引する指導者や経営者など数多く輩出するエリート養成学校である。例えば、今回訪問したボーディングスクールのひとつである Choate Rosemary Hall はジョン・F・ケネディ第35代大統領の母校であり、Deerfield Academy はゴールドマン・サックス投資銀行の元会長ジョン・ワインバーグを輩出している。石角によると、ボーディングスクールとは、寮生活を基本として、厳格な規律の下にスポーツ・文化・芸術・社会奉仕・リーダーシップ教育に重点をおいて、徹底した少人数クラスでの個別教育を行う6年制(中・高一貫)あるいは4年制(高校)の私立の中等教育学校である。中でも、特にスポーツが重視されており、各スクールが掲げる教育理念に基づいて高度な教育目標を達成するために、スポーツがそれぞれのカリキュラムに位置づいているという。(石角、2010)

そこで、大学体育のさらなる発展に向けて参考資料を得るために、ボーディングスクールにおけるスポーツ教育の実態についてインタビュー調査と学習環境調査を行った。(松田、2013)インタビュー調査では、学校運営の中心的な役割を担う教職員および生徒を対象とした。ここではインタビュー調査結果の一部を紹介

したい。

【2】調査の概要

1. 目的

本調査の目的は、スポーツを通じた教養教育を重視する米国東海岸周辺地域のボーディングスクールの実態を把握し、大学体育の今後のあり方に関する示唆を得ることである。

2. 日程および調査実施者

2012年2月13日(月)～16日(木)の4日間に1日2校(計8校)を以下のメンバーで訪問した。

- ・松田裕雄(筑波大学体育系講師)
- ・金谷麻理子(筑波大学体育系准教授)
- ・武田丈太郎(筑波大学体育系特任助教)
- ・桐生習作(筑波大学体育系特任助教)
- ・斎藤克明(イーコンシェルジュ株式会社代表取締役)

3. 調査の対象

調査対象者は、以下の8つのボーディングスクールに所属するアスレティック・ディレクター、アドミッション・ディレクター、ヘッドマスター(校長)および生徒であった。

- ・Berkshire (BKS)
- ・Cheshire Academy (CA)
- ・Choate Rosemary Hall (CRM)
- ・Deerfield Academy (DA)
- ・Suffield Academy (SA)
- ・The Taft School (TF)
- ・St. Thomas More School (TMS)
- ・Wilbraham & Monson Academy (WMA)

以下では、学校名を( )内の略称で示す。

4. インタビュー調査における主な質問内容

調査対象者に対する主な質問内容は、以下の通りである。

- ①スポーツ教育の理念および位置づけについて

- ②役職(アスレチックディレクター／コーチ／教員)の役割について
- ③カリキュラムについて
- ④指導の方針および方法について
- ⑤米国のスポーツ界について

### 【3】調査の結果

以下では、上記質問内容に対する主な回答を示す。各回答の末尾にある( )内には回答者が所属する学校名を記載した。

#### ①スポーツ教育の理念および位置づけについて

- ・スポーツ活動では、リーダーシップスキル、チームワーク、特に、チームの結びつきを確実に学ぶ。(BKS)
- ・スポーツマンシップとは、勤勉であること、上達する努力を厭わないこと、フェアプレイ、チームワーク、相手や仲間を尊重することである。(CRM)
- ・近年の傾向として、大学進学を視野に入れて学習の効率化を図るために、1種目に特化するという特定の種目のみを希望する生徒も増加してきている。しかし、多くの種目を経験させることは、すべての生徒に自らの才能を開花させるチャンスを与えるのであり、自らの得意・不得意を知る良い機会にもなるので、やはり複数のスポーツを体験させることが重要である。(CRM)
- ・生徒たちに経験してほしいことはチームの一員になるということである。(DA)
- ・文武両道はどのように教育するかではなく、そもそも文武両道を前提として、教員を採用し、生徒を集める。(DA)
- ・生徒には、学業、スポーツ、人間性などすべての面で優れていることが要求される。そしてその教育はスポーツにおけるコーチの責任の下に行われる。すべてのボーディングスクールにおける一貫した理念の背景には、人間的にバランスのとれた生徒、アスリート、そしてゆくゆくは市民を育成するという伝統が存在している。技術や年齢の違いはあるとも、経験することの価値はすべての者に等しい。(DA)
- ・スポーツは生徒たちの教育の一部である。生徒たちにはスポーツを通して、良識ある人間であること、良き市民であること、良き生徒であること、良きチームメイトであること、そしてチームに対する忠誠心をもつことを学習させる。(TF)
- ・スポーツマンシップとは、率先して行動すること、

誠実であること、計画的であることで、これらを正しく行うことができれば結果は自ずと付いてくる。(TF)

- ・スポーツによる学習によって、人としての強さを身につけ、社会に貢献できる人物に育ってほしいと考えている。(WMA)
- ・公立学校との違いは、良き市民、良き生徒、良きアスリートであることを一人の教員が兼務で伝えていくということである。(WMA)

#### ②各役職(アスレチック・ディレクター／コーチ／教員)の役割について

- ・コーチの目標は、あくまで生徒たちが素晴らしい経験をしたと思うことである。勝敗はそれを助けてくれるものにすぎない。勝敗に価値を見出す商業スポーツとは根本的なところで異なっている。高い競争率を乗り越えて入学してくる生徒に対して、有能なコーチを揃えているので、コーチの影響力が大きくなる。これによってスタンドプレーよりもチームワークの必要性をしっかりと教授できる。誰よりも生徒と長い時間を過ごすコーチがもつ役割は非常に重要である。(CRM)
- ・教員人事は、ティーチング(学業)、コーチング(スポーツ)、寮生活の3つの観点で行われ、専門性よりも総合的に優れた人物が高く評価される。(DA)
- ・コーチと教員は基本的には兼任が義務で、人事基準もそうになっている。しかし、1軍チームには専属のプロコーチを充てることもある。若手教員の育成においては、威厳の保ち方と生徒との距離感、そして一貫性が重要であると考えている。自分が現在教育者としてあるのは、チームスポーツへの参加による成長の証かもしれない。競技経験は授業の延長であり、有能な先生は有能なコーチでもある。教員には競技の経験が豊富なことと、専門知識、コミュニケーション能力、チームの団結力を作り上げる能力を有していることが求められている。(DA)
- ・教員には、「3学期のうち2学期はインターミューラル<sup>\*\*2</sup>、スカラスティック<sup>\*\*3</sup>、演劇、ダンス、社会奉仕活動のいずれかに参加すること」、「課外プログラムで活躍すること」、「経験なき教員は経験ある教員と協力すること」が要求される。なお、他教科を専門にしながらスポーツを指導するということが常識である。(TF)
- ・アスレチック・ディレクターは、主にスケジューリング(競技会の日程管理)、コーチ人事、遠征の手

配、設備・ユニフォーム管理等を行う。(TF)

- ・コーチにとって勝敗は重要である。しかしそれ以上に、生徒がシーズンを通してどのように成長し、発達し、試合で楽しめたかが重要なのである。あるいはスポーツマンシップに則り、最高のコンディションで臨めたかどうか、正しい方法で勝利を得るということを生徒に伝えることが重要なのである。(TF)

### ③カリキュラムについて

- ・インタースカラスティックとインターミューラルがある。どちらにせよ、毎日2～3時間のスポーツ活動を行う。インターミューラルのプログラムは、芸術系の活動やボランティアなどの社会奉仕活動に代えることもある。スポーツの教育的価値のひとつには、高い競争心をもった仲間や相手との活動による経験が、人としての成長を促進するということが挙げられる。(SA)
- ・スポーツが苦手な生徒であってもスポーツに参加することによって、身体的に健全になり、学問でも良い結果が出せるようになる。(TF)
- ・テクノロジーに頼りがちな生徒に対して、スポーツプログラムでは他者との積極的な接触を促すことができる。優秀な選手が素晴らしいのではなく、チームが優秀であることの素晴らしさを優先に教育する。競技性は非常に重要であり、すべての生徒がチームに所属しなければならない。チームの一員として逆境や負けを克服して、正しい勝ち方というものを理解するのである。(WMA)

### ④指導の方針および方法について

- ・ボーディングスクールにおけるコーチの指導法については、もともと入学してくる生徒の学力が高く、教科の学習でもスポーツでもとても競争意識が高いため、スパルタ的な指導をする必要はない。ただし、身体能力が十分なのに真面目に取り組まない生徒に対して、しつけのために叱ることはあるが、技術ができなくて叱ることはない。(CRM)
- ・コーチはキャプテンとコミュニケーションを図る。学期の始めにミーティングを行い、ゴールを設定し、チームとして何が必要か、何が重要かを話し合う。(TF)

### ⑤アメリカのスポーツ界について

- ・大学入試において、チーム活動や社会奉仕活動が重視されていることがスポーツ教育の活性化の大きな

要因となっている。教育としてのスポーツは勝利至上主義であるプロスポーツとは相容れない。しかし、勝利を目指すことで多くのことを学ぶことができる。スポーツによる人格教育がもっとも重要である。(CRM)

- ・ボーディングスクールにおける入学試験における重要な柱は、道徳観、運動能力、社会性と学力の4つである。スポーツと学問には、学びの構造や原則、組織的であること、誠実さなど多くの点で共通点があり、これによってスポーツで良い成果を出せる生徒は学問でも伸びるといえる。時間の管理ができるようになるということも同様である。つまり、教科の学習とスポーツを通して、同じことを教えている。しかし、現在の米国におけるスポーツは、派手なプレーや個人的なプレーをメディアが取り上げる傾向にあり、チームよりも個人の功績が着目され、その影響が子どもたちにも現れている。(TF)

## 【4】まとめ

ボーディングスクールの時間割は、一定の必修科目を除き、基本的に生徒毎に異なっている。各生徒の能力や理解力、学問的興味、進学を希望する大学、将来構想などを考慮して、生徒自身が教務担当者と話合って決めていくのである。なお、この時間割の中に教科としての体育は含まれていない。しかし、放課後のスポーツ活動が義務づけられているのである。しかも特定の場合を除いて、ほぼ全員が他の学校と対抗戦を行うインタースカラスティックのプログラムに取り組む(表1)。また、年間通して1種目に取り組むのではなく、3シーズン制で原則的にすべて異なる種目を行う。そのため、種目によって1軍になる場合もあれば3軍になる場合もあり、個人競技もあれば団体競技もあるなど、多様な環境下で勝利や成功を目指し、そこでスポーツマンシップやチームワーク、問題解決の方法を学んでいくのである。したがって、ボーディングスクールにおけるスポーツは、課外でありながらも義務であり、教科の学習と同様に重視されているのである。また、スポーツは人間的成長に不可欠なものとして学校生活の一部に組み込まれている。このことはNEPSAC ※4が定めている Code of Ethics and Conduct (倫理・行動規範)にも示されており、すべてのボーディングスクールに共通した認識であるといえる(松田、2013)。

表1 週間スケジュールの例

	Mon.	Tue.	Wed.	Thu.	Fri.	Sat.	Sun.
午前	授業	授業	授業	授業	授業	授業	休み
午後	スポーツ (練習)	スポーツ (練習)	スポーツ (対抗戦)	スポーツ (練習)	スポーツ (練習)	スポーツ (対抗戦)	
夜	自習						

これに関連して、教員のあり方にも特徴が見られる。質問①に対する Deerfield Academy の「教員人事は、ティーチング(学業)、コーチング(スポーツ)、寮生活の3つの観点で行われ、専門性よりも総合的に優れた人物が高く評価される」という回答にもあるように、ボーディングスクールの教員は必ず複数の役割を担うことが採用の条件となっている。つまり、生徒は昼夜問わずいかなる場面でも成長するという前提のもと、教科を教える教師として、スポーツのコーチとして、生活のアドバイザーやカウンセラーとしてさまざまな場面において指導にあたるのである。中でも、スポーツは生徒たちが人間的に最も成長するものと見なされているため、コーチにはスポーツの教育的価値の理解や技術の指導力、チームを勝利へと導く力など、高度な能力が要求されている。また、このようなコーチもそれぞれ個別にはではなく、教育理念を共有し、お互いの能力を高め合いながら協力して生徒を目標達成へと導いていくのである。

ボーディングスクールは、我が国でいう有名私立中学・高等学校である。そのため、ここで得た情報がそのまま大学体育に当てはまるとは言い難い。しかし、ボーディングスクールにおけるスポーツ教育の「スポーツが人を育てる」というあり方は、同様の教育目標を掲げている大学体育の今後に役立つ示唆を与えてくれると考えられる。特に、スポーツの競技性を最大限に活用して人間的な成長を促していくという点や、スポーツは日常に不可欠なものとして生活の一部に根付かせていくという点は、十分に参考になると考えられる。今後は今回の調査結果をより詳細に検討し、大学体育の現場へ還元できる資料を提示していきたい。

注

- ※1 Sport & Physical Education Renovation in Tsukuba の略。「知の競争時代における大学体育カリキュラム再構築に関する実践的研究」JSPS 科研費基盤研究(A)21240060、研究代表者：宮下憲。
- ※2 スポーツ教育のプログラムのひとつで、対外試合を前提とした競技スポーツを行うプログラム。
- ※3 インタースカラスティック同様、スポーツ教育のプログラムのひとつであるが、対外試合は行わず学内のみで活動するプログラム。
- ※4 New England Preparatory School Athletic Council の略。米国北東部ニューイングランド地方にあるボーディングスクールを対象としたスポーツ大会等を運営する団体。

付記

本研究は、上記科学研究費補助金に基づく研究成果の一部である。記して謝意を表する。

文献

- 1) 石角完爾：[改訂版]アメリカのスーパーエリート教育 - 「独創」力とリーダーシップを育てる全寮制学校(ボーディングスクール)、ジャパンタイムズ、2010
- 2) 松田裕雄、吉岡利貢、河村レイ子、桐生習作、金谷麻理子、武田丈太郎、門野洋介：大学体育の価値向上に向けた一考察 - 教育実践における目標・教授・学習に着目して -、大学体育学、9：69-92、2012
- 3) 松田裕雄、金谷麻理子、桐生習作、武田丈太郎、斎藤克明、向後佑香、小倉晃布：海外視察調査報告書2012 米国東海岸周辺地域のボーディングスクールにおけるスポーツ教育の実態、筑波大学体育センター、2013